

# ボランティア・市民活動における

全国社会福祉協議会／(株)福祉保険サービス

## 多様化するボランティア活動とリスクの発生

### 多様化するボランティア活動

近年のボランティア活動は、高齢者・障害者福祉、子育て・青少年健全育成、医療・健康関連、教育・文化・スポーツ振興、地域美化・環境保全、被災地救援・災害ボランティア、防犯・防災・交通安全、人権擁護、国際交流、まちづくり、自治会・町内会、地区社協活動など、多様な分野・場面で展開されています。

さらに、地震や火山の噴火、集中豪雨・豪雪などの自然災害、口蹄疫・鳥インフルエンザといった疫病の発生等に対応した活動も増えており、熱中症の増加や、薬品の吸引、細菌感染等といったリスクも生じてきています。

### ボランティア人数の推移

ボランティア人数は、いまや700万人を超え（全社調べ）、ボランティア・市民活動の多様化・活発化に伴い、今後も増加していくことが想定されます。（図表1参照）

### ボランティアの高年齢化

ボランティア組織を対象とした調査<sup>\*</sup>によると、組織の中心となるメンバーの年齢層は、50%以上の組織で「60歳代以上」。一方、「30歳代以下」をあげる組織は6%にとどまっています。また6割以上の組織で、60歳代・70歳代のメンバーが所属しているとの回答でした。

これは、若年齢層のボランティアが減少しているというより、高齢化の進展や社会的な活動への関心の高まりに伴い、中高年齢層のボランティアが増えているものです。その方向性は今後も続くものと予想されます。

ボランティア・市民活動が多様化するとともに、ボランティアが増加し、かつ年齢層が高くなってきた現状において、さまざまな要因が絡み合って新たなリスクを生み出し、事故が発生しやすい状況につながっていると考えられます。それらのリスクに対処するためのマネジメントがより一層求められてきているのです。

※『全国ボランティア活動実態調査報告書』（平成22年7月／全社協）

## 求められるリスクマネジメント

### 「リスクマネジメント」とは何か？

リスクマネジメントは、「リスクコントロール」と「リスクファイナンス」という二つの側面から考えられます。

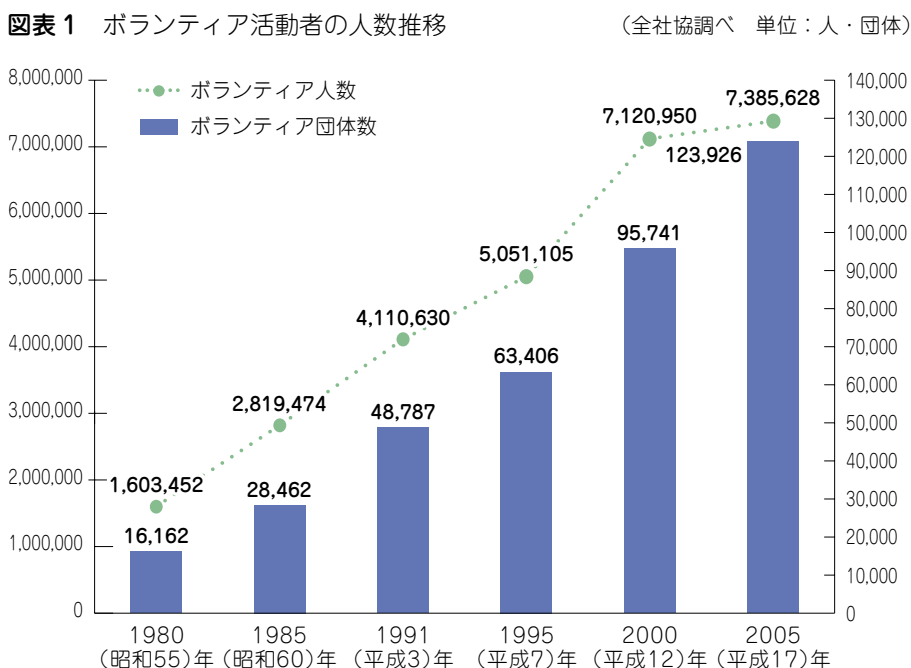
「リスクコントロール」とは、ボランティア・市民活動を実践するうえで、その活動を阻害するリスク（常に変化する状況、不確実性）を発見・分析し、事故を未然に防いだり発生頻度を減らす、あるいは、事故が発生してしまってもその損害を軽減させるために、技術的・人為的な対策を行うことです。

また、「リスクファイナンス」は、万が一事故が発生してしまったための、貯蓄や保険などで資金面の対策を行うことです。この二つを組み合わせ、小さなコストで活動にもたらされる悪影響（損失）を予防したり、最小限に抑えることを「リスクマネジメント」といいます。

### リスクマネジメントの必要性

ボランティア・市民活動に伴う事故の発生について、事前に検討を行い、対策をとり、防止・軽減することにつ

図表1 ボランティア活動者の人数推移



# るリスクマネジメント —事故の防止と軽減

いて、「ボランティアは事業活動とは違って自発的にやっているのだから、そんな面倒なことをする必要はない」と思う人もいるかもしれませんが、しかし、事故の発生をゼロにすることは事実上不可能です。事故が起きてしまうと、ボランティア自身が被害を被ることになります。それだけでなく、例えば高齢者や障害者の介護を引き受けた場合など、ボランティアは注意義務を果たすことが要求され、事故の内容によっては、ボランティアが法的責任を問われるケースも発生しています。

事故は突発的に発生するものですが、決して予測不可能なものばかりではありません。リスクに対して予測と対策を検討することで、リスクに強い活動・体制をつくり、その軽減を図ることができます。そして、ボランティアだけでなく活動にかかわる関係者が、安心して安全に活動に参加するために、適切なリスクマネジメントを行うことは、ボランティア自身と活動全体の安定的な継続・発展になくてはならない重要な要素となっているのです。

## ボランティア活動中の事故の実態

ここでは、全社協が団体契約者となっている「ボランティア活動保険」の加入者による活動中の事故の実態を通して、ボランティア活動中のリスクについて考えます。(データ提供：日本興亜損保株式会社)

### 増加する事故件数

活動中の事故は増加傾向にあり、1回の事故に対する保険金支払額も年々高くなっています。(次ページ図表2参照)

### ケガの60%以上が61歳以上

ボランティア活動中にケガをした事故の60%以上が61歳以上、さらには事故の50%以上が66歳以上となっています。ボランティアの高年齢化とともに、ケガをしたボランティアも高年齢化しています。(次ページ図表3参照)

### 最も多い転倒事故

ケガをしたときの状況で最も多いの

が転倒です。転落、衝突を含め、全体の2/3が足元や前方の「ちょっとした不注意によるもの」といえます。つまり、「ちょっとした不注意を減らすこと」や活動地域・周辺環境に注意・配慮をすることが事故の防止につながります。(次ページ図表4参照)

### 骨折が3分の1以上

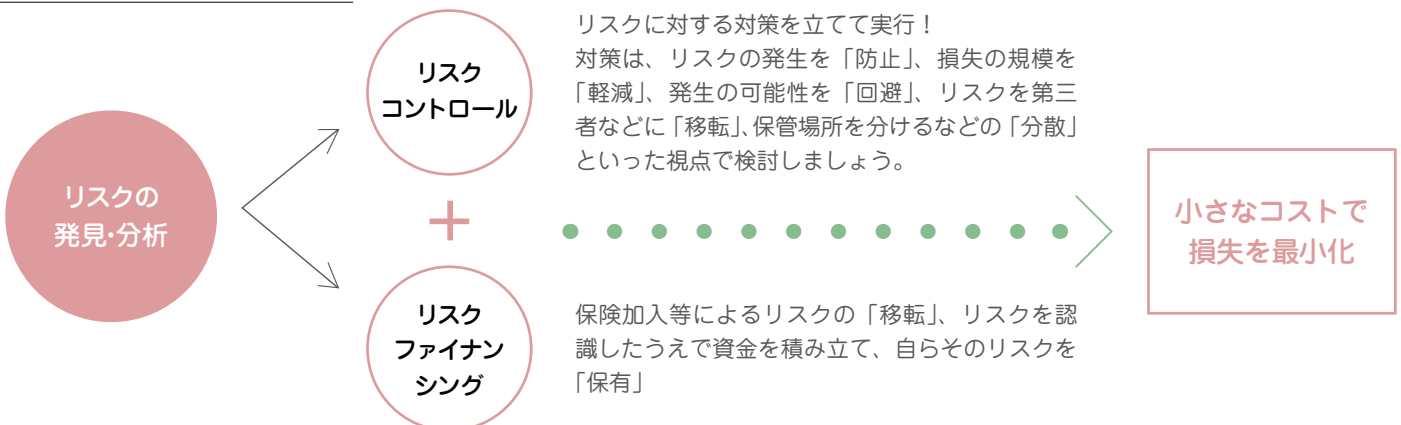
ケガでは骨折が全体の約34%と多く、捻挫、脱臼、打撲を含めると、全体の約3/4を占めています。「骨折」となれば、治療期間も長く、ケガの回復まで時間を要します。(次ページ図表5参照)

### 後遺障害が急増

近年のボランティア活動中の事故の特徴として、後遺障害に至るケガが急増していることが挙げられます。保険契約における後遺障害とは、事故発生日から半年以内に身体の一部を失ったり、その機能に重大な障害が永久に残された場合をいいます。

後遺障害を被るようなケガをするケースは全体の約4%で、決して少ない割合ではなく、件数としては4年前

## 「リスクマネジメント」とは何か?



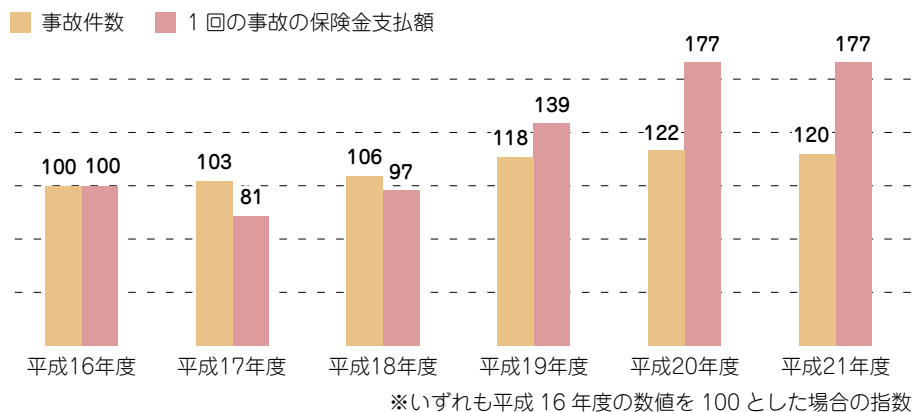
の5倍程度に増加しています。後遺障害の要因として急増しているのが、骨が弱くなりはじめたときに容易に起こりうる圧迫骨折等です。ちょっとした不注意による転倒が骨折につながり、場合によっては後遺障害を被ってしまうということが考えられます。「転倒は怖い」ことを再認識し、慎重な活動を心がける必要があります。

## リスクマネジメントを実践しよう

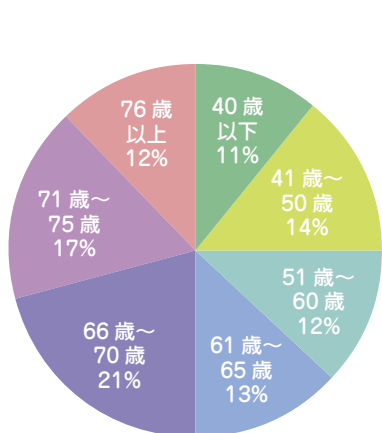
P D C Aサイクルを実践してみましょう。

P (リスクの発見・分析) → D (対策の決定・実行) → C (フォローアップ・対策の評価) → A (対策の改善) を繰り返すことが、リスクマネジメントの手法です。

図表2 事故件数と保険金額の推移



図表3 ケガをしたときの年齢



## リスクコントロール

### メンバー間の情報共有が大切

リスクコントロールは発見・分析したリスクに対して、その対策を決定・実行することです。リスクコントロールを行うことで事故やトラブルがなくなるというものではありません。しかし、ボランティア自身を含め活動にかかわる人びとが、安心して安全に活動を継続できるように、活動に取り組む前に、「リスクの発見・分析」とリスクコントロールについて話し合うことから始めてみましょう。メンバー全員でその情報を共有することが大切です。(図表6参照)

### リーダー・推進者に求められるもの

まずは、ボランティア個人がリスクコントロールの必要性に気づき、実践

することが重要です。しかし、一人では発見できるリスク、考える対策など、すべての情報量が圧倒的に不足しています。ボランティア・市民活動のリーダー・推進者は、リスクコントロールについてメンバーで話し合う機会をぜひつくってください。そうすることで、リスクに対する理解と対応策がメンバー間で共有・意識化され、よりリスクに強い体制にすることができます。そしてリーダー・推進者は、日々のボランティア・市民活動において率先して注意喚起を促すことはもちろん、新たに発生するリスクを敏感に察知し、そのマネジメントに挑戦することを意識してください。

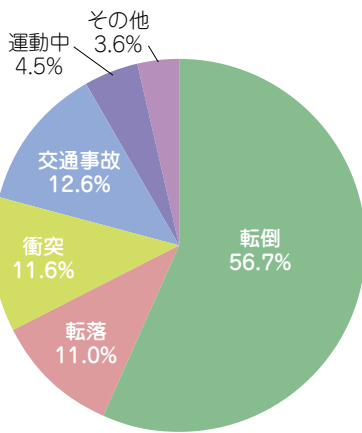
## リスクファイナンス

### 保険の活用が有効な方法

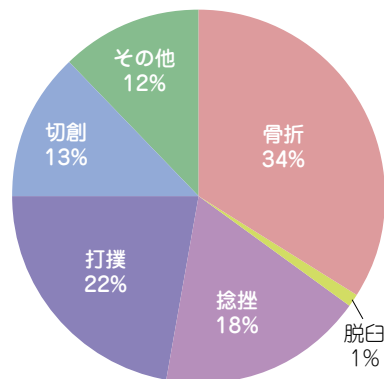
リスクファイナンスには、発生した損害を自らが負担する「保有」と第三者に発生した損害を負担してもらう「移転」という二つの方法があります。

巨額の損失も想定される活動中の事故には、ボランティア活動者の自己資金力による「保有」では対応が困難な場合が多いことから、「移転」が有効な方法と言えるでしょう。その「移転」のなかで最も多く使われている手法が「保険」です。ボランティア・市民活動の場面では、「ボランティア活動保険」「市

図表4 ケガをしたときの状況



図表5 ケガの状態



※ 図表2～5 平成19年度発生事故について調査・分析/日本興亜損害保険株式会社

民活動保険」と呼ばれるものが活用されています。お近くの社会福祉協議会や行政等でどのような保険が取り扱われているか確認・相談してください。

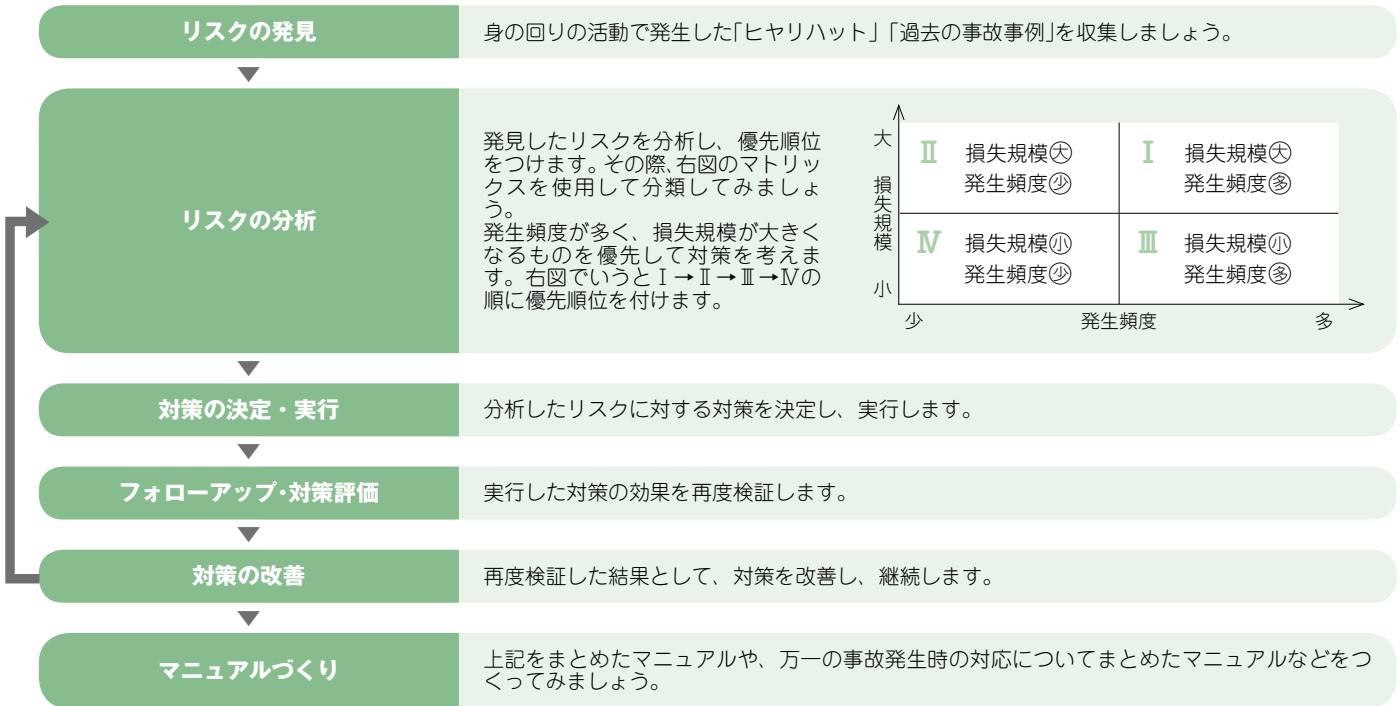
〈参考〉

全国社会福祉協議会 地域福祉・ボランティア情報ネットワーク  
<http://www3.shakyo.or.jp/cdvc/>  
 全国社会福祉協議会ホームページ（災害ボランティアのページ）

<http://www.shakyo.or.jp/saigai/katudou.html>

株式会社福祉保険サービス  
<http://www.fukushihoken.co.jp/>

図表 6 リスクの発見からリスクコントロールへ



事故データからみた  
**事故防止・軽減に向けた  
 10のポイント**

ボランティア活動は、参加を決定したときから始まります。事前の情報収集、準備を徹底し、活動中はもちろん、活動場所と自宅との往復途上も気を抜かず、慎重に行動することが重要です。

右に記載する10のポイントは基本的なことばかりですが、改めて確認してみましょう。

- 無理は禁物（体調・体力）** 無理をすることは事故を起こしに行くようなものです。活動者自身だけでなく、周りの人たちのリスクも高まります。
- 事前の情報収集と安全確認** 事前の情報収集・安全確認・日常点検でリスクを予知しましょう。熱い気持ちだけでなく、冷静な判断力も必要です。
- 活動に適した服装** 帽子、軍手、運動靴などの事前準備で、転倒や熱射病等の防止をしましょう。
- あせらず・気を抜かず** 自宅を出てから帰るまでが活動です。集合場所に遅れそうなら連絡をしてあせらず向かい、現地での活動を終えても自宅に帰るまでホッとして気を抜かないことが大切です。「慣れ」が事故の基となるので、活動中は常に慎重な行動を心がけましょう。
- 準備運動・柔軟体操** ボランティア活動はスポーツと同じ。体をほぐし、あたためてから活動しましょう。
- 注意事項をよく聞く** 責任者の説明をよく聞き、リスクを認識し、その対策を再確認しましょう。
- 休憩と水分補給** 疲れたら遠慮なく休憩をとりましょう。疲れは事故の原因となります。水分補給で熱中症を予防しましょう。
- 過信禁物** いまの自分にできること、できないことをしっかり認識しましょう。「以前はできた」が一番危険です。
- 足元注意** 事故原因の多くを占めている転倒、転落を防止することが大切です。「足元注意」をメンバーで声かけしあいましょう。
- 周囲の人との協力** 単独では行動せず、できるだけ複数で行動しましょう。声のかけあい、情報共有が大切です。